

生活者として名古屋市北区名城に居住

執筆者は財団法人全国強制抑留者協会愛知県支部理事

部理事

(愛知県 河村 広康)

シベリアと私の青春

三重県 後藤 良之介

はじめに

私が財団法人・全国強制抑留者協会三重県支部に入会させて頂いたのが、平成十六(二〇〇四)年十月であります。八十一歳でした。八十二歳の今年には戦後六十年ということで各種の催しや、今年こそ総決算の年との認識のもと運動が行われていることは「財団だより」第三十二号の鈴木善三理事長の発表にもかなり具体的に報告されております。私もせめて五年ほど早く入会させて頂いておれば良かったと思う昨今である。

さて、抑留記については何年いや何十年前も前の壮年期から、文章の上手下手はともかく、活字にして残したいという気持ちはずっとありました。

色々な会合の席などで請われて、断片的にシベリアの思い出話をしたことはありますが、活字に

したものを残すチャンスは今日までありませんでした。

同窓会Y君の「ガ島放浪戦記」、K君の「再び死神に見放されて」などの体験記を読み、文字通り死と紙一重の数奇な運命をたどりながらも生き延びた人たち。私のように酷寒のシベリアで四年三カ月も労働を強いられた者。お国のための美名のもと、たった一度の青春を捧げた若者のいかに多かったことか。

ちなみに私は、大正十二（一九二三）年三月二十五日三重県三重郡常磐村大字松本にて出生、昭和十五（一九四〇）年三重県立四日市商業学校卒業ですが、同窓生百七十七人中七十人が戦死で同校の長い歴史の中で最も犠牲者の多い年次となりました。

ここで、出生後の経歴を記します。

昭和十年三月 常磐尋常高等小学校卒業

昭和十五年三月 三重県立四日市商業学校卒業

昭和十五年四月 株式会社日立製作所入社

昭和十九年二月十日 現役兵として工兵第五十

三連隊に入営（京都伏見

工兵隊）

昭和十九年十月

参謀本部陸地測量部に転

属

昭和二十年五月

関東軍陸地測量部に転属

昭和二十年八月

満州国通化にて終戦 シ

ベリアに抑留される

昭和二十四年九月

ナホトカより山澄丸にて

舞鶴に復員

初年兵から東京大空襲まで

昔の軍隊の人事というものはいい加減なもので、なぜ私のような商業学校出身の第一乙種の人間を、当時の各兵科の中で最も体力を必要とする工兵にしたものか未だに理解できないが、何とか初年兵教育にも耐えて、幹部候補生になり、一緒に初年兵でビンタをとられた戦友たちが南方に送られたのに（ビルマ方面に派遣されたと聞く）私ともう一人の幹部候補生二人が残されて、東京の参謀本部

陸地測量部に転属となり、全国の工兵隊から集められた十六人の幹候生が工兵と縁が切れて、現在の明治大学杉並校舎(当時は軍に接収されていた)で測量の教育を受けることになる。

この測量部(現在の国土地理院)転属についても未だに合点のいかなないのは、私のような商業学校出で三角法が何やら、サイン・コサインが何のこどやら、さっぱり分からない人間より、全国の工兵隊には専門の教育を受けた兵隊さんがいっぱいいたと思うのになぜ?と考えるが、京都の工兵隊では参謀本部の要請をうけて、員数合せに工兵として使い物になりそうにもない私を送り込んだと見るのが妥当のようだ。

陸地測量部の教官は佐官待遇の優秀な人達だった。どの学科も実習も中途半端なままであったが、落第もなく教育終了、しばらくして全員見習士官となる。

この期間いろいろなことがあったが、一番鮮明に覚えているのは昭和二十年三月十日の東京大空

襲である。我々の宿舍兼教室でもあった明治大学杉並校舎は杉並区和泉にあり、この付近では当時一番大きい建物で周辺には畑もあった。夜になるとこの建物には私たち十六人の候補生がいるだけで全くの無防備、空襲などにどう対応するのか教育も受けていなかった。

ボーイングB 29の大編隊が襲って来て焼夷弾をばらまいた。周辺の住民の人達が続々と集まってきた。兵隊のいる不燃性の建物ということで避難所になった格好だが、集まった人を屋内に導き、屋上の焼夷弾を消すのが精いっぱい、どうすることもできなかった。

朝屋上から眺めると渋谷方面、新宿方面一面の焼野原で甲州街道のかなたの新宿まで遮るものはない有様であった。その後も毎日のように空襲警報が鳴り機銃掃射なども行われるようになり戦争が身近になってきたが、私達の教育は五月中旬まで続けられた。

東京大空襲直後の三月十八日には、福島県の泉

村演習地に三角測量の実習に出掛けている。

私の軍隊期間、抑留期間合わせて約六年でありませんが、この間、敵と対峙して鉄砲を撃ち合うとかの実戦の経験は一度もなく、東京での空襲体験が唯一の戦争体験でありました。

昭和二十年五月下旬、東京での教育を終えた十六人は晴れて見習士官となり、当時の戦況もよく知らされないまま、次の命令を待つこととなりました。

東京脱出・満州へ

「見習士官 後藤良之介 関東軍陸地測量部に転属を命ず」昭和二十年五月二十日ごろであったと記憶している。参謀本部陸地測量部のホヤホヤの見習士官だった私は同期のもう一人と共に、こんな命令を受けて満州国の新京(長春)に出発することになる。中支(南京と記憶している)に転属命令をうけた同期の見習士官三人と相談の上、これからどうなるか分からないので、各自一度郷里に立ち寄って、下関で落ち合うことにする。私は東

海道線で名古屋まで行くことになるが、情報によると空襲のため横浜駅までしか通じていないというので、苦勞して横浜駅に行く。駅周辺はまだ空襲でくすぶっている有様でした。久しぶりの四日市は、まだ本格的な空襲は受けておらず、世相は戦時色一色で兵隊さんは大もてであった。二日ほどの滞在であったが、親父が無理して都合してくれた軍刀を手にもう故郷も見納めかという気持ちも多少あったと思うが、案外サバサバした気持ちで入営のときのような見送りをうけて、満州の任地に出発した。当時の戦況をふりかえるとこのころ沖繩は米軍の手に陥ち、一緒に初年兵教育をうけた戦友たちはビルマや比島で若い命を散らしていたのである。

沖繩で激戦が行われているらしいという断片的な情報が入っていたが、とにかく一日も早く任地へという使命感で、同僚と打ち合わせて下関へ急ぐ。前後して五人の顔ぶれは揃ったが、釜山へ渡る連絡船がいつ出るか全く分からないという。玄

界灘には既にアメリカの潜水艦が出没していて非常に危険な状況であったことを後で知るが、数日後に仙崎港(長門市)から関釜連絡船が出るという情報を得て仙崎港に急行する。船は真夜中に出航、全員救命具をつけての緊張の一夜であったが、何もなく釜山に着く。

朝鮮鉄道で京城(ソウル)、平壤(ピョンヤン)、新義州を経て奉天(瀋陽)で南京に行く三人と分かれて新京にやつと到着。関東軍測量部は新京郊外の緑園という所であった。早速部隊長に申告である。

『見習士官 後藤良之介、関東軍測量部に転属を命ぜられただいま到着いたしました。ここに申告いたします』終わるやいなや部隊長殿から一喝を食らう。『貴様ら東京を出発して何日かかっているんだ』剣幕に驚きながらも、内地は空襲で交通機関が混乱していることなどを説明するとやつと納得してくれた。参謀本部から私達が出発したむね電報がはいつていたらしく、部隊長も心配し

てのことであった。二週間かかったのだから無理もない。

この日から終戦までの二カ月余りの短い満州での測量隊の訓練が始まる。

この時期、新京はまだ空襲もなく吉野町などでは三味線の音も聞こえる有様で、つかのまの別天地であった。しばらくして四日市方面も空襲があったというニュースは聞いたがどの程度の被害なのか詳しい情報は全くつかめなかった。

新京の測量部には東京から来た先輩もいたが特殊な兵科でもあり、誠にのんびりとしたものであった。このころ、関東軍の主力は沖繩に行つて、もぬけの殻だったのであるが、そんな状況などは全然伝わってこなかった。

八月九日のソ連軍進駐までの約二カ月、私達は新京、吉林地域を中心に小さなグループで三角測量などの実習訓練に明け暮れていた。

なお、当時の戦況は次の通り極めて深刻で重大な事態にあった。

昭和十九年二月十九日、連合軍が硫黄島に上陸、日本軍守備隊二万三千人は一カ月余の勇戦ののち、玉砕する。東京から千二百キロの距離だ。

昭和二十年三月十日、東京が大空襲を受け、下町一帯が焼野原になる。四月から中心街へ空襲は移り、皇居も被害を受ける。ついに、小磯内閣も国民の非難で総辞職する。五月八日、ドイツが無条件降伏。

一方、四月一日沖繩本島に上陸した米軍は、着々と橋頭堡を拡大していた。日本軍は最後の力をふりしぼって、戦艦大和の特攻、陸海軍の特攻を続ける。しかし、六月中旬、とうとう沖繩も玉砕。日本軍の戦死者は約十万人であった。

八月六日午前八時十五分、広島に原子爆弾が落とされた。三日後の同九日十一時長崎に二発目の原子爆弾が落ちた。

同日未明、ソ連軍百六十万人が満州へなだれ込んだ。満州には関東軍の主力はほとんどいなかった。ソ連軍がまたたく間に席卷する。十五日正午、

終戦に関する天皇の放送があった。長い長い戦争が終わった。満州事変から数えて十四年、七百万人以上の兵力を使った戦争であった。

ポツダム宣言

「日本国軍隊は完全に武装を解除されたる後、各自の家庭に復帰し、平和かつ生産的の生活を営む機会を得しむべし」日本が受諾したこの「ポツダム宣言」第九項を、戦勝国ソ連は守らなかった。

日本政府推定で五十六万三千人の軍人・軍属と一万人余の官吏、民間人が旧満州などからソ連へ連行されたのだ。いわゆる「シベリア抑留」である。

約千二百カ所の捕虜収容所・監獄に送られ、多くは三、四年、長い人は十一年も、苛酷な屋内外の労働を強いられた。ソ連の戦後復興を手伝わされたのだが、厳寒や飢え、重労働で死者は七万人ともいう。消息不明者も多い。「異国の丘」の歌も生まれた望郷の収容所では、民主化（共産化）教育や仲間同士のあつれきもひどかった。無数の体験記がある一方、ナゾも多い。平成二年六月二十日、

二十一日には東京で抑留をめぐる日ソ初のシンポジウムがある。出席するソ連の歴史学者キリチエンコ博士がモスクワで注目すべき発言をした。シベリア抑留者はポ宣言違反。ソ連資料では日本兵の抑留者約六十四万人で死者六万四千人など初公開した。ソ連は長年、死者を四千人と過小評価していたとしても、博士は対日参戦までも批判したそう。ソ連の日ソ中立条約破棄、参戦はヤルタ秘密協定の連合軍合意とはいえ、抑留問題とともに日本人に多くの対ソ不信を抱かせた。シンポその他で、ソ連側はどんな説明、歴史的謝罪をしてくれるか。

瀬島龍三氏のこと

元大本営参謀で、終戦直前の昭和二十年七月関東軍参謀に転じ、シベリア抑留十一年、帰国後の日本経済界に不死鳥のように甦った数奇な運命の持ち主、伊藤忠商事の瀬島龍三氏は平成七年二月、戦後五十年の中日新聞インタビューに応えた中で次のように述べている。

「八月十五日に日本は天皇の命令によって降伏しました。その時点では日ソ両軍は闘っておるわけです。その翌日の八月十六日に、スターリンが極東軍最高司令官のワシレフスキー元帥に命令を出しています。

ソ連の公文書館から出てきた資料を読みますと、二つの命令内容があります。

一つは、北海道北部占領の準備に早く着手せよ。ただしその実行については改めて指示する。これはアメリカとの関係で抑えていたわけです。

もう一つは、降伏した日本の関東軍の将兵は日本に帰す、と。それはポツダム宣言第九条で、戦争が終わったら将兵は母国に帰すということになっており、スターリンもこれに判を押している。

ところが八月二十二日にトルーマン米大統領からスターリン宛の親書で、北海道北部占領にアメリカは断固反対であると申し入れている。そしてその翌日の二十三日になって、スターリンはワシレフスキー元帥に対して、関東軍の中から労働

に耐えうる者約五十万人〜六十万人をシベリアに連れて来いと命令しているのです。それも細かく、一千人単位でハバロフスクその他十数カ所へもつてこいと。これがシベリア抑留の原点なのです」。

前記北海道北部とは留萌と釧路を結ぶ線から北といわれている。

私達が実習の途中から関東軍司令部のあとを追って朝鮮国境に近い通化という町でソ連軍により武装解除をされて、吉林市の旧師範学校に集結させられたところが、トルーマン大統領のスターリンあて北海道占領反対の親書なるものが届いた時であると推察されます。

この時期ソ連軍の警備はそれほど嚴重ではなく、もうすぐ日本にダモイ（帰国）出来るといふ噂が流れていました。ところが二十三日のスターリンの命令で私達は一転してシベリアに送り込まれることになったのです。

私たち見習士官はソ連の参戦と同時に関東軍司令官の命令？とかで予定より三カ月ほど早く少尉

に任官しました。いわゆる「ボツダム少尉」である。前記師範学校では日本軍隊の建制がバラバラにされ将校と、下士官、兵がそれぞれ別々の建物に収容されていた。

八月下旬ごろから急に警備が厳しくなり、所持品の検査など行われるようになった。

シベリア連行

俘虜輸送用の貨物列車が仕立てられると、ソ連の将校がきて、大尉一人、中尉五人、少尉十人といたった具合に呼び出して、下士官、兵の上にくっつけて、急ごしらえの俘虜大隊を編成、少尉の私は七十人ぐらいの小隊長ということになったが、知っている顔は一人もないし名前も分らない。ダワイ、ダワイで二段に仕切られた貨車に乗せられて満州の荒野を北に進む。貨車の前後にはマンダリン銃を持ったソ連兵が警戒していて全く自由はない。

この時点においても列車はシベリア鉄道を経由してウラジオに行き船で日本にダモイという噂が

流れていた。

ハルピンを経て黒河に着く、有蓋車に詰め込まれているので外の景色や町並みなど全く見えない。黒河に着いたのは九月下旬ごろだったと思う。黒龍江を隔て、対岸はソ連の町ブラゴエシチェンスクである。寒々とした殺風景なブラゴエの町である。黒河とブラゴエで野営をさせられた。初冬のブラゴエでは小雪がちらつき寒かった。まだこの時点でも日本に帰れるというデマ情報を信じていたのである。

ブラゴエからは更にお粗末なシベリア鉄道の貨車に乗せられて動き出す。もうすぐ日本に帰れるという希望があった。

しかしどうだろう。来る日も来る日も太陽が進行方向の後ろから昇るではないか。汽車は西に向かって走っているということである。

バイカル湖

不安が増して来たが、シベリアは広いから一時的にこんなことになるのだと言い出す者もいた。

今まで見たこともない大原始林の中を列車は確実に西に進んで行った。途中で何時間も停車することもしばしばで、何日目か記憶にないが「海が見えた！日本海だ」誰かが叫ぶ。よく見ると確かに海である。水平線のかなたまで陸地らしいものは全然見えない。

これが有名なバイカル湖と分かったのはしばらくしてからである。

バイカル湖は面積三万一千五百平方キロメートル、琵琶湖の約四十七倍で、淡水湖では世界で六番目、最大深度は一、六二〇メートルで世界一である。初めて見る我々の目には正に海である。

私達の鈍行列車は湖の南端の入江のような所をぐるっと回るのに丸一日を要した。

バイカル湖に注ぐ川はいくつもあるが、流れ出ている川はアンガラ川だけで、下流はエニセイ河となり北極海に至るのである。

琵琶湖の瀬田川が宇治川となり淀川になるのに似ている。

イルクーツクの街とラーゲル

アンガラ川の流れ出る辺りにイルクーツクの町がある。琵琶湖と大津市のようなもの、昔のシベリア出兵のとき、日本軍の最先鋒がこの町まで来たそうで、後日、町の古老から話を聞いた。古い教会などもあつて歴史を感じさせる町である。

イルクーツクの郊外で列車からおろされ、町から大分離れた小高い丘の上にポツンと建っているラーゲル（収容所）に連れて行かれた。

四年後に日本にダモイするまで、数回この付近のラーゲルを転々としたが、この最初のラーゲルはお粗末この上ないバラックで、最近までドイツ軍の俘虜が収容されていたということであつた、

自由を束縛された、寒い、暗い、ひもじい、希望のない、異国シベリアでのラーゲル生活が始まる。気温はもう氷点下で、満州の冬を経験したことの無い私はすごく寒く感じた。

積雪はそれほど多くはないが、この時期の雪はそのまま根雪となり翌年五月ごろまで解けること

はない。寒い日は零下三〇度をこえ、地面は二メートルぐらゐまで凍つて石のようにカチカチになる。

春が訪れるまでダモイの希望は無くなり、二十四時間望楼から歩哨に監視され、三重の有刺鉄線に囲まれたラーゲルでの生活が始まる。

小隊長としての私の部下は七十人ぐらゐで、半分ぐらゐが四十歳前後の兵隊さん、あとの半分が十六〜十七歳の少年であつた。彼らは軍人ではなく、満蒙開拓義勇隊で大陸での成功を夢見て渡つた農家の二男、三男といった人たちで、内田という指導員を先生と呼び、統制のとれたグループであつた。

まだあどけなさの残る未成年の彼らがなぜ俘虜としてシベリアに連れてこられたのか員数合せとしか考えようがない。

ラーゲルの建物はどこも似たりよつたりで、出入口は一カ所で、ここに衛兵所とかソ連側の詰所があり、将校を長とする何人かが交代で詰め

ている。私達の生活の場はお粗末なバラックの中央にペーチカを囲んで二段に仕切られた板間になつており、上段も下段も中腰でないと移動できない。この板間の小さな藁布団一枚分が各自のスペースで、横になつて寝るのがやつとの広さである。

南京虫と虱

イルクーツクの最初の収容所で私は始めて南京虫にお目にかかった。先住民のドイツ兵がいなくなつて何日目か知らないが血に飢えていた南京虫さんが、人の臭いを感じて活動を始めたのである。よく見ると板壁の隙間に親南京虫、子南京虫がゾロゾロいる、天井の連中は人間様目がけ落下してくる、つぶすと異様な匂いがある。最初の冬は特に南京虫と虱に悩まされたが、毎日やられていると皮膚がカサカサになつて余り感じなくなつてしまふ。

昭和二十年の冬は収容所の環境も食糧事情も最悪で、加えて酷寒下の重労働で死者が多く出たのですが、死因の大部分が栄養失調や発疹チフスで

あつた。このチフスの媒介が虱であつた。

点呼

ラーゲルでは毎朝の点呼は厳しかつた。こんなシベリアの僻地で逃亡する者もないと思うのに、凍るように寒い広場に五列縦隊に整列させ、アジン、ドヴァ、ツリー、チェティーレ、ピアチとのんびり一人で数えるのだから相当時間がかかる。時々途中でザビール（忘れた）といつて初めからやり直しである。全員屋外に呼び出しておいてから、別の兵隊が所持品検査と称して私達の持ち物をひっくり返し、目ぼしいものを持ち帰るのである。

戦後満州国内の生産設備や物資を火事場泥棒のごとくソ連国内に持ち込んだやり方は、ラーゲルを管理する兵士にまで及んでいた。

ラポートとノルマ

「ニエラポート ニェクーシャッチ」（働かざる者食うべからず）共産国ソ連の鉄則である。すべての労働にノルマが課されており、八時間労働

が建前であるが、ノルマが達成されなければ何時間でも働かされる、ソ連労働者のノルマはそのままヤポンスキー（日本人）俘虜にも適用され、私達はこのノルマに泣かされ通しであった。知的労働者や技術者のノルマは案外軽く、肉体労働者のノルマは重かった。

シベリアでの約四年三カ月、私が体験したラポートは次のようなものである。

水道管理設のための溝掘り（イルクーツク市）

イルクーツク駅の線路工事や除雪作業

キルピーチ（煉瓦）工場の作業

木造住宅の建設作業（第二イルクーツク市）

雲母採掘の坑内作業

炭坑（石炭露天掘り）の作業（チェレンホー

ボ）

セメントや木材などの荷おろし作業

コルホーズやパン工場の作業

収容所内の洗濯班の作業

冬の便所清掃作業

その他色々のラポートをやらされたが、今でも冬になると、昭和二十年冬のイルクーツク郊外の水道管理設のための溝掘り作業の辛かったことを思い出す。直径二五ミリのパイプ埋設するために地面の幅三メートルからV字型に深さ三メートルまで掘り進むのである。冬期に地表から二メートルは凍結するので、更に一メートル深く掘る必要があるのだと言う。単純な土作業はノルマも最もきつい。僅かな黒パンと水みたいなスープでは空腹と疲労に耐えられず、酷寒と共に犠牲者の多かった最初の冬であった。

チェレンホーボでの石炭露天掘りの作業は三年目の冬で、ここでは作業そのものよりラーゲルから炭坑までの距離が遠く、現場で八時間労働のために早朝暗いうちに出発、凍った雪道を二時間近くトポトポ歩いて炭坑に着く。ラーゲルに帰るともう真っ暗、この作業はそれほど長くなかったが忘れられない。

私がカマンジールとして一番長く携わったのが

第二イルクーツク市の木造住宅の建設である。二階建てのアバートで、クズネツオフという名前の人の良いナチャールニツク（監督）と一緒に基礎工事から完成までやりました。抑留二年目だったと思うが、ペリウオッチ（通訳）が不足でこの時期ロシア語を勉強せざるを得なかった。シベリアで習ったロシア語なので上品なロシア語ではないが、日常の会話程度にはなんとか不自由しなくなり、プラウダやイズベスチアなどのガジエータ（新聞）も大きな見出しの内容ぐらひは分かる程度になつていたが、ほとんど忘れてしまった。

酷寒のシベリアでのラボートの思い出は尽きないが、帰国してから読んだ抑留記や最近頂いた「平和の礎」に発表された先輩諸兄のご労苦を拝見して思うことは、私の場合抑留期間の大部分が、イルクーツク市という都会の周辺であつたことと、後述する野沢大尉という隊長に恵まれて、犠牲者も少なく食料も途中でピンはねされることもほとんどなかったと思う。

野沢大尉のこと

イルクーツク市は駅で第一と第二があり、バイカル湖に近い古い都市が第一で、少し離れて第二イルクーツクがある。最初のラーゲルから移されたのがこの第二イルクーツクの郊外で、駅は大きいがシベリア鉄道の操車場兼貨物駅のようなところであつた。ここの収容所に移されて間もなく、^{かっかく}恰幅のよい大尉が隊長として派遣されてきた、野沢清人という人である。

ノルマの軽減や、食料のこと、それこそ身体を張つてソ連側と折衝してもらつた。ラーゲルの場所と野沢大尉という隊長のおかげで、苦労はしたが犠牲者は少なかった。

野沢大尉は復員後念願の国会議員となり、二期目のときと思うが訪ソ議員団の一員として、モスクワに乗り込んだ時は、苦労したシベリアを思い感無量であつたと思う『俘虜から国賓へ』という本を後日頂いた。

坪内寿夫氏のこと

軍隊での階級は上等兵ぐらいだったと思うが、隣の小隊に坪内寿夫という一風変わったというか個性の強い兵隊さんがいた。

裸一貫で引き揚げた彼が、後の『四国の大将』とか『再建の神様』とか言われ来島グループの総帥となった坪内氏である。

シベリアのラーゲルでもその存在が目立ったのは、彼がハラシヨラポーター（模範的労働者）ではなく、全く反対のプローホラポーター（ずぼら労働者）だったからである。

彼の主張は、敵国ソ連のために命をすりへらして働く必要はない。少しでも楽をして、少しでも早く日本にダモイすることだというのが信念で、正にその通りであるが悲しいかな俘虜の身の上、プローホラポーターがいると他の者まで連帯で迷惑することになる。

コマンジールとして彼と一緒に作業に行くこともあったが、時には文句を言ったことも思い出す。

民主運動

荒涼としたシベリアでの抑留生活も、二年目になると不自由な中にも落ち着きが出てきた。

このころ、「日本軍俘虜」（ワイナー・ヤポンスキー・アーミイ）向けの「日本新聞」が配られるようになった。発行、編集はハバロフスクであったと思う。内容は戦後日本の混乱状態、物価の高騰、進駐軍のことなどオーバーにPRしてあり、俘虜の送還問題については『日本政府は君達旧関東軍将兵の早期帰国を望んでいない』『ソ連政府の要請に対して日本が船を差し向けない』など、復員後に聞いたのとは全く逆な宣伝的内容であった。そして各地の日本軍収容所で、民主運動が広がっていることを報じるようになった。

シベリアの民主運動なるものは、旧日本軍の間で、自然に拡大したように言われていたが、そうではなく、アクチーブと称する一部の連中を巧みに操縦して、無気力な俘虜の気持ちを民主運動の名のもとに統一し、作業意欲を向上させて、ソ連の戦後復興に役立たせようとした当局の企みだった。

たことは間違いない。シベリアの民主運動で洗脳された日本人俘虜が帰国して、共産主義に共鳴するとは到底期待していなかったと思う。

現地シベリアで仮想敵とされた日本の将校や元警察官やプロホラボータが毎日のように「吊るし上げ」や「自己批判」をやらされ、思い出してもゾツとするようなことが日本人同士の間で行われたのである。ソ連当局のお先棒を担いでこの運動のリーダーとなっていた連中は帰国後どのように行動したのだろうか。

G H Qに出頭したこと

昭和二十五年三月に日立製作所に復職して間もないころ、勤務先の工場長あてだったと思うが、東京のG H Q（連合軍総司令部）より後藤良之介を出頭させてもらいたい、不在の間、欠勤扱いにしないでほしいという意味の呼び出し状が来た。当時G H Qと言えば絶対的な権力を持っていた訳で、忙しいからでは断れない相手である、公用出張よろしく島根県の工場から東京に出張した。

皇居の近くにあったG H Qでは、日系二世か三世か知らないが日本語ペラペラの人間と一対一で二日間ほど質問というかシベリアにおける労働の具体的なことなど聞かれた。彼らの目的は比較的長期間抑留された人間を呼び出して、私の場合イルクーツクのシベリア鉄道の現況などを詳しく聞いていた。面白いことに質問内容について「そのことは一緒の收容所にいた〇〇少尉がよく知っている」と言うと言つて翌日か翌々日には出頭して来て「よー！お久し振り」といった具合でした。

軍用地誌のようなものを作る資料を集めていたものと思う。

引揚港「まいづる」をしのぶ集い

昭和六十年十月七日から四日間、舞鶴市の主催で、海外引揚げ四十周年の記念行事が行われた。三十六年前になるがナホトカから舞鶴に感激の上陸をした私は、このことを知り懐かしさの余り参加しました。復員以来音信のないシベリアの仲間にあえるかも知れないという淡い望みもあった。

樺太で終戦を迎えてシベリアに抑留されていた友人を誘って出掛ける。戦後舞鶴に引き揚げた人は約六十六万三千人で、その大部分がナホトカからである。これに従事した船舶は延べ三百六十四隻、興安丸、高砂丸などは有名、私は山澄丸という貨物船であった。舞鶴市総合文化会館で当時の写真展や、ニュース映画、菊地章子の歌謡ショウなど、「母は来ました今日も来た、この岸壁に今日も来た」熱唱に目頭がジーンとくる。

庄巻は大型フェリー「らいらつく」を引揚船に見立てての舞鶴入港再現である。舞鶴西港を出航したフェリーは若狭湾に出てウターンして舞鶴港へ、三十六年前の感動がよみがえる。出迎えるランチに乗った女子職員が「お帰りなさい」と手を振っている。海の色、山の緑は昔のままであった。旧友には巡り合えなかったけれど二十六歳の昔にかえり感慨無量であった。

私がこの抑留記を当初お引受けした期日にも大分おくれ、やっと不備だらけながら脱稿した平成

十七年十月七日、偶然にも中日新聞夕刊に舞鶴市の「引き揚げ六十年の集い」が行われたという小さな記事を発見。

記事の最後に、これまで十年ごとに開かれてきたが、引き揚げ体験者の高齢化が進み、参加者も減っていることから今回が最後となった、と書いてある。寂しいけれど仕方がない。ありがとうとお礼をいいたい。

おわりに

私達が六十年前シベリアに抑留されたのも独裁者スターリンによる強制拉致であり、多くの貴い命が酷寒のシベリアで失われた。生きて故国に引き揚げた人達も、奪われた青春は戻らない。

抑留者協会の皆さんも高齢となられ、会員の減少も致し方ないと思いますが、その労苦の体験は『平和の礎』などに収録されて長く後世に伝えられなければならない。

【執筆者の紹介】

大正十二年三月二十五日

三重県三重郡常磐村大字松本にて出生

昭和十年三月

常磐尋常高等小学校卒業

昭和十五年三月

三重県立四日市商業学校卒業

昭和十五年四月

株式会社日立製作所入社

昭和十九年二月

現役兵として工兵五十三連帯に入営（京都伏見工兵隊）

昭和十九年十月

参謀本部陸地測量部に転属

昭和二十年五月

関東軍陸地測量部に転属

昭和二十年八月

満州・通化にて終戦シベリア・イルクーツクに抑留される

昭和二十四年九月一日

（水道管敷設・建築工事・煉瓦工場・石炭露天掘り等）
舞鶴港に帰国復員（山澄丸）

昭和二十五年四月

三日、京都駅で父、妹、小学校の同級生が出迎
四日市諏訪駅で郷里の方々の出迎（入営前の勤務先日立製作所に連絡、自宅待機）
日立製作所に復職（大量の人員整理中の採用に感謝）

昭和二十六年九月

独立創業を志して退社、化学薬品売買業を開業
その後法人化（株式会社中部化成）して今日に到る

ライオンズクラブメン
バー

(三重県 林 英夫)

永恨の爪跡シベリア抑留の四カ年

滋賀県 重田良三

一 私の軍歴

昭和十八(一九四三)年八月 徴兵検査第一乙

種合格

昭和十九年一月十日 福井県丹生郡立待村中部

三十六部隊入隊

昭和十九年二月 ソ連国境近い満州国密山

迫撃砲大隊に転属 一期

の検閲終了後、隊長の奨
めで憲兵の試験を受け採
用され、十九年三月、新
京にある関東憲兵教習隊
に入隊。六カ月の教育終
了、任憲兵兵長

昭和十九年十一月

満州奉天城内憲兵隊に配
属、満州人の住む奉天城